

横山利枝教授への献辞

総合管理学部長 三 浦 章

横山利枝先生は、2006（平成18）年4月に本学に着任され、以後6年間にわたり、総合管理学部の教育・研究の発展に大きく貢献され、偉大な足跡を残されました。2012（平成24）年3月31日付で定年退職されるにあたり、先生のこれまでの総合管理学部および大学院アドミニストレーション研究科へのご貢献に感謝するため、さらに先生のご退職を記念して、記念号を捧げます。

横山先生は、1947（昭和22）年に熊本県葦北郡津奈木村にお生まれになりました。幼少時代を地元で過ごされた後、1969（昭和44）年に三重県立高等看護学校第一看護学科（現三重県立看護大学）を、翌1970（昭和45）年に京都大学医学部付属助産婦学校（現京都大学医学部保健学科助産専攻）を卒業されました。

その後、1970（昭和45）年4月から、助産師・看護師として臨床看護従事に従事され、副院長や看護部長等の要職に就かれました。その間には、高等学校衛生看護科教員として看護教育に従事されていた時期もございます。激務の中にもかかわらず、1999（平成11）年には産能大学経営情報学部経営情報学科を卒業され、2001（平成13）年3月に同大学院経営情報学研究科修士課程を修了されました。

そして、2004（平成16）年4月からは学校法人学文館上武大学看護学部助教授に就任され、さらには、山口大学や聖母大学で非常勤講師も務められました。引き続き、2006（平成18）年4月には、本学部の地域・福祉ネットワークコースの開設に合わせ、単なる研究者ではなく、実際に看護管理を経験され実務に精通されている方を実務界から迎えたいとの要望があり、教授として奉職していただきました。以下に教授の教育研究活動に関わるご活躍について、ご紹介いたします。

まず研究面では、看護管理・看護経営のあり方を軸に研究を進められてきました。看護に関わり始めて40年余となる先生の研究の根底には、社会的弱者に対する温かいまなざしを感じます。これは幼少時より水俣病患者を近くに感じて育ち、またハンセン氏病患者との出会いがあり、1960年代後半に盛り上った大学紛争の最中に学生時代を送ったこと、さらにはカトリックの信仰があるようです。具体的な研究業績は、本学奉職以降に著書7編、研究論文および研究論文17編にまとめられています。特に看護管理学の確立に向けた研究に鋭意取り組んでこられました。看護管理という言葉は、今日では看護基礎教育の中でも重視されるようになってきていますが、看護管理学としての学問は未確立の分野です。先生は、看護管理の重要性に早くから着目されてこの領域の研究に取り組んでこられ、その成果を研究論文や学会等で発表されてきました。特に、看護経営・経済の視点から多くの調査研究に取り組み、看護管理と病院経営との関係について多くの指摘をされて、看護管理者教育は大学院の修士課程で実施すべきであるという論を展開されています。

また、看護管理者の組織運営のあり方に関する研究にも数多く取り組まれており、これらの成果は、人材育成学会・日本看護学会等さまざまな学会で活発に発表されてきました。

本学での教育面では、おもに大学院生、それも社会人である看護師の方々を情熱と熱意を持ってご指導されました。ご担当いただいた科目は、「ナーシング・アドミニストレーション」、「看護経営・経済論」、「看護組織論」、「特別演習」等です。

講義では先生の豊富な実務経験を基に、単に知識面にとどまらず、実際の運用上必要な「人」の面から捉えた内容をご講義いただきました。講義内容は、学生の自主性や考える力を伸ばすために意を凝らしていらっしゃいました。グループ討議や事例検討を通して主体的に取り組む時間を大切にされており、講義が終わってみると教科書内容を網羅したものになっていたとのことです。さらに、講義後は、毎回レポート（7枚を基本）提出を義務付けていらっしゃい

ました。「初めは慣れないせいか非常に苦痛に感じたレポート作成も、回を重ねるごとに楽になります。『文章を書く』作業も、数学の計算のように訓練すれば上達していくのだと知りました。」とはある学生の弁です。一人一人のレポートを必ず読んで感想を述べられ、図表作成や文献検索等の基礎についても丁寧に指導されました。また、「ゼミ」と呼ばれ、教員の個性が反映される「特別演習」においては学生指導に人一倍の時間を割き、折に触れ先生のご経験を基に看護のあり方から、看護管理者の心構えまでをお話していただいたと聞いています。

先生は論文の書き方だけでなく、研究に取り組む姿勢についても厳しく指導されました。特に視野を広く持つことの重要性を強調されていました。その一つとして、世界の状況や動きにも目を向け、日本との相違について考えることが必要であり、それには実際に海外に行って自分の目で見ないと分からないという考えから、海外研修を積極的に実行してこられました。具体的には、毎年、米国・オーストラリア・英国等に20名程度の院生を引率し海外研修を実施されました。社会人が多く長期の休暇は困難なため実質1週間ほどの短い日程でありましたが、ホスピス、小児病院や訪問看護協会等々での研修がびっしり組み込まれ、事前学習からレポート提出まで求めていらっしゃいました。中身は充実しており、院生からは「研修旅行では各国の医療事情や病院経営等について知るだけでなく、旅行者の心得や海外の人たちに対する心遣いなども厳しく指導を受けました。また、一緒に旅行を共にできる仲間の存在の大切さも学びました。お陰で非常に勉強になりました。」との声が聞かれます。

さらに横山先生には、本学の運営面においても、大学院教務委員、環境に配慮した取組検討会委員として学部、大学運営に多大な寄与をいただきました。

社会活動の分野では、高齢社会を迎えヘルスケアニーズが高まる中、医療や福祉領域における経営と人材育成の重要性に鑑み、日本看護協会・全国訪問看護事業協会・日本医業経営コンサルタント協会等において、地域や施設での経営戦

略・人材戦略・人材育成等へのアドバイスや研修講師に積極的に取り組まれました。

このように教育研究での活躍の傍ら、ご自宅には広い農園をお持ちになり、ウィークエンドには園芸に励んでいらっしゃいました。サツマイモ・ジャガイモ・玉ねぎ・大根・ゴーヤ・きゅうり・トマト等々、数十種にわたる植物を育てていらっしゃると伺っています。愛車に積んで大学にもせっせと運んでいたとのこと、いただいた教職員や学生も少なからずいたのではないのでしょうか。

以上、横山先生のご経歴および6年間にわたる熊本県立大学におけるご業績やそのお人柄について、簡単にではありますが、ご紹介させていただきました。横山先生は、研究者として優れた業績をあげられ学術の発展・振興に寄与されたほか、教育者として、優秀な人材を数多く医療や福祉の世界に送り出され、そのご功績はまことに顕著なものがあります。

横山先生が定年を迎えられ本学を去られることは、残念としか言いようがありません。今は総合管理学部および大学院アドミニストレーション研究科に対する教授の多大なご貢献に感謝するのみです。退職後にご講演、NPOを始めとした地域活動や医療福祉経営コンサルタントを今までと同様に進め、かつ晴耕雨読をモットーに、ガーデニング・野菜づくり、料理等にも勤しんでワーク・ライフ・バランスを保ちながら、さらには国内外の旅行やドライブを楽しむご計画と伺っています。これまでも増して多方面でご活躍されることを祈念いたします。